

区ですが、今後10年間で中学校卒業生数が130人程度減少するため、有識者による検討委員会を設置し、南学区の教育の在り方について検討する中で、西置賜地区についても検討を行いますとしておりますので、こうした検討会が準備されるんだろうと思います。それを考えますと、そのような形になる前に、この西置賜地区でどうした高校の在り方が適切なのか。例えば普通高校につきましても、普通系学科について、8地区全てに少なくとも1校配置しますとしていますので、8地区ということは、置賜地区の東南置賜と西置賜なんです。西置賜には普通科は1校は配置しますという、これが県の基本方針です。そして、その学科については、市町村等と連携して、地域創生に向けた取組を実践する学科など、新たな学科、コース等の創設を検討します。必要に応じて、普通科高校の再編、産業系学科も含めた専門学科との併設も含む、についても検討しますということです。これらを踏まえ、長井工業高校の振興とともに、長井高校の在り方、そして、地域として長井高校の普通科と専門学科がどのような形であるべきなのかということは、ぜひ進めなければいけないと感じて、質問させていただきました。

先ほど市長からぜひ進めたいということです。今後の進展に期待したいと思います。

以上で質問を終わりにいたします。

○内谷邦彦議長 ここで暫時休憩いたします。再開は午後1時といたします。

午前11時58分 休憩

午後 1時00分 再開

○内谷邦彦議長 休憩前に復し、会議を再開いたします。

市政一般に関する質問を続行いたします。

なお、鈴木 裕議員から資料の配付について申出があり、会議規則第150条の規定により、許可いたしましたので、ご報告いたします。

鈴木富美子議員の質問

○内谷邦彦議長 順位3番、議席番号9番、鈴木富美子議員。

(9番鈴木富美子議員登壇)

○9番 鈴木富美子議員 とともに長井の鈴木富美子です。

このたびの質問は、2項目についてお聞きいたします。

1項目は、6月に行われた独立行政法人国際協力機構、JICAの事業についてお聞きいたしますが、質問に当たり、これまでの長井市とタンザニア連合共和国の交流について、少し触れさせていただきます。

私がタンザニア連合共和国に関心を持つようになったのは、長井南中学校の女子生徒が作文で紹介した山と山は会うことはないが、人とは会うことができるというタンザニア連合共和国のことわざを知ったことです。それ以来、タンザニア連合共和国に親しみを感じ、市民訪問団の一人として訪問もしてまいりました。長井市においては、長年にわたりタンザニア連合共和国と交流し、信頼関係を築いており、今後も、マラソンはもちろん、高校生や若者との交流がさらに活発になることを願い、質問することになりました。

2項目めは、ふるさと長井会との交流についてお聞きいたします。

最初に、JICAについて少しお話をさせていただきます。JICAは、開発途上国が直面する課題を解決するため、技術協力、有償資金

協力、無償資金協力などの日本の政府開発援助、ODAを一元的に担う、2国間援助の実施機関で、150以上の国と地域で事業を展開しています。国際社会の課題は、日本とも密接に関係しており、国内外のパートナーと協力して、それらの解決に取り組み、世界の平和と繁栄、日本社会のさらなる発展に貢献している機構です。

そのJICAの事業として、8月20日から22日にかけて、第9回アフリカ開発会議が横浜市中で開催されました。それに先駆け、本市とJICA東北センターのパイロット事業として行われたのが、タンザニア職業訓練校生の長井工業高等学校訪問です。本市には、6月16日から27日にかけて、タンザニア・ダルエスサラーム職業訓練校より、教員2名、学生6名の皆さんがおいでになり、授業に参加するだけでなく、市内企業訪問も行われました。その後、7月15日から22日にかけて、市と長井工業高等学校長及び外国人材受入れに関心のある市内企業、合わせて8名がタンザニア連合共和国の産業人材及びビジネス環境の現状と課題について見聞を深めることを目的とするビジネス・スタディツアーに参加し、その報告会が8月5日に開催されています。さらに、20日からの第9回アフリカ開発会議には、市長が参加され、アフリカ諸国と交流を行ってきた国内4市の一つとして、本市がタンザニアのホームタウンに認定されました。皆様、いろいろな報道でご存じと思いますが、本市以外の3市は、千葉県木更津市はナイジェリア、愛媛県今治市はモザンビーク、新潟県三条市はガーナと、それぞれホームタウンに認定されています。

これらを踏まえて、1項目めとして5点お聞きいたします。答弁は全て市長にお願いいたします。

1点目は、長井工業高等学校での研修に際し、準備期間も含めて、長井市としてどのように関わってきたのかお聞きいたします。

2点目は、JICAと長井市は、本事業を通してどのような成果を想定しているのか、現時点での考えを教えてください。

3点目は、ビジネス・スタディツアーについてお聞きいたします。市長も参加されておりますので、ツアーの内容はどのようなものだったのか、お聞きいたします。

4点目は、ビジネス・スタディツアーの報告会を開催なされたようですが、参加された皆様からの報告の内容はどのような内容だったのか、お聞きいたします。

また、ビジネス・スタディツアーの事業効果を高め、市内企業に波及させるために、広く産業界に向け周知し、開催することをJICAに提案されてはどうでしょうか。

1項目めの最後に入ります。今後、同様の事業を進めるに当たって、国際化の必要性をどのように位置づけ、どのような政策を打ち出していくのかをお伺いいたします。特に長井市とタンザニアとの関わりや高校生及び青少年同士の交流など、どのように行っていくのか、お伺いいたします。

次に、2項目めに入ります。

2項目めの最初の質問です。ふるさと長井会は、設立して今年で10年になりました。会員の皆様には、長井市に対し、多方面にわたり、応援していただいているとお聞きしております。その活動内容が市民の皆様にあまり周知されているわけではないように思いますので、今までの活動内容や組織及び成果について、戦略監にお聞きいたします。

そして、その活動を市民に一層周知することが必要だと思いますが、この件についても併せてお尋ねいたします。

次、ふるさと長井会は、長井市出身者または同会の目的に賛同する者をもって組織するとあり、目的は会員相互の親睦を図り、ふるさと長井との交流及び情報交換を密にして、長井市の

発展に寄与することとされております。会員は、県外在住の会員と県内在住のサポート会員があります。ふるさと長井会は、この10年でしっかりとした土台ができたと思いますので、これからはもっと交流人口を増やすために県内在住のサポーター会員の拡大に取り組んではいかがでしょうか。このことについて市長の考えをお聞きたいします。

以上で壇上からの質問を終わります。ご清聴ありがとうございました。

○内谷邦彦議長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 鈴木富美子議員から、大きく2点、ご提言をいただきました。

まず、最初に、1点目のJICAのパイロット事業としてタンザニア職業訓練校の本市来訪についてということで、5点ほど、いろいろご質問やご提言をいただきましたので、順次お答えを申し上げます。

議員のほうからは、長井工業高等学校での研修に際して、市としてどのように関わってきたかということなんですが、鈴木富美子議員からは、もう今から30年ぐらい前ですか、南中のお母さんがタンザニア人のお子さんが、総理大臣表彰をいただいたんですね。私、そのときいなかったですね、多分。ですから、知らなかったんです。こちらに東京から戻ってきて、そういう事実を知った。すごいなと思ったんですけども、それ以来、タンザニアというのは、我々にとって、特に私の地元のほうにいらっしやいましたので、身近な国というよりは、よくあんな赤道直下の暖かい国から、長井のような雪深いところに来て、頑張って暮らしておられるの、偉いなと思っておりました。

東京オリパラが決まって、ホストタウンという制度ができたときに、私ども、どこの国がいかということでもいろいろ検討したんですけども、当然、ドイツのバートゼッキンゲンというのは姉妹都市でしたし、あと、中国の双鴨山

市、そういった交流のあるところから考えたんですが、なかなかそういう大きい国は、我々長井では、関われるかもしれないですけども、そんなに深い付き合いはできないと。そういったときに、タンザニアというのは大変魅力ある国なので、候補としていろいろ検討して、2016年に認定をいただいて、以来9年間の付き合いあったわけです。

2回の市民訪問団、鈴木富美子議員にも同行いただきましたし、当時の市議会の議長、副議長とか、関わっていただいたりして、それ以来、交流をしてきたわけですけども、今回の具体的なきっかけというのは、一昨年11月にJICAさんのタンザニアのプロジェクトでレディース・ファーストというプロジェクトがあって、それについては、2回ほどご依頼あったんです。1回目は、私、都合つかなくて、齋藤副市長に行っていて、2回目もお誘いいただいたので、2回目、私、行ってまいりました。1回目のときに齋藤副市長からいろいろ復命をいただいて、なかなかすばらしいプロジェクトだということで、2回目行ったときは、引き続きそういった大会に出ることと同時に、最終日の帰る前に、実は職業訓練校を視察させてもらったんですね。ダルエスサラームの職訓校を視察して、施設はちゃんとあるんです、職訓校、国の職訓校というのは、私はよく分からないんですが、地元の長井職訓校、米沢の職訓校見たことあるんですが、規模がかなり大きいんです。国でやっているだけあって、すごいなと思って。

ただし、特に機械金属加工とか、そういった部分、あとは、自動車を分解して、何かそれを勉強できる、そういったエリアもあったんですが、ほとんど使われてないんです。さびついていて。これは多分教える人がいないんだなと。そしたら、大分の人がシニア青年協力隊で、40代ぐらいの方が、宮崎からいらして、その方に聞いたら、3年間、タンザニアで子供たち

にそういった技術を教えているということでした。そこで、戻ってきてから、JICAの理事長特別補佐の方に、実は私どもに、長井工業高校というすごく優秀な高校があって、それも総理大臣表彰受けた高校だと。ところが、定員割れ、ずっとしていて、本当にもったいないと。教師陣なんかも、あと、機器もあるから、一回、職業訓練校の学生を派遣して、研修というのはどうでしょうかみたいなことを申し上げたんです。それがきっかけです。

私のほうは、狙いは2つあって、実は、定員割れしているので、話題づくりをしたかったんですね。長井工業高校は、去年というか、今年の3月の卒業生かな、その前の年か、なんですが、長井工業高校のものづくり人材育成推進事業というのを商工会議所と一緒にやっていたので、長井工業高校の課題研究発表会ってあるんですね。それを学校内ではなくて、ぜひタスとか市民文化会館でやってくださいと、ここ10年ぐらいやっているんですけども、その5年前ぐらいに、ちょっと番組をつくろうということで、YBCのほうにお願いして、30分番組を1年かけてつくったんですね。長井工業高校を中心に、物づくりのまち、長井のPRということで。それを結構、長井工業高校の年間の行事なんかも含めて、一人一人の生徒、何人かの生徒の感想とか、意見とか、思いとか、自分の夢とか、そういったことを織り交ぜた、なかなかいい出来の番組だったんですけども、それが結構反響あって、その前までは定員割れ、結構厳しかったです。3割、4割まではいかないにしても、7割前後ぐらいだったのが、その年の次の年の3月の入試のときは、実は定員以上の応募があったんです。それは、機械科だけではなくて、電子も。いや、こういうPRというのは必要なんだなということで、以降、土屋教育長のほうのお力添えもあって、市民文化会館で、ここ3年ぐらいは、2年か、南中、北中の3年生にも、

2年生かな、2年生にも見ていただいて、そんなこともやっているんですけども、そんなことで、話題づくりをすべきだなと思っていたんですね。

あとは、午前中の勝見議員のほうからあった、県外入学、こちらなんかについても、広く長井工業高校というのを、地元の子供たちに知ってもらいたいという思いもあって、そんなこと考えたんですね。ちなみに、ご存じだと思うんですが、長井工業高校は、以前は南陽市とか川西町から何十人かいらしている。今、川西、1人かゼロです。学年はゼロなんていうのは普通で、南陽高校も四、五人です。小国もゼロです。長井と白鷹と飯豊と、あと、ちょっと1人、2人しかいらしてないと。だから、これをもっとPRする必要があると思って、それを提案したんですね。

そしたら、いろいろ検討いただいて、これからタンザニアは、大きく経済が、今、高度経済成長期なんですね。年率5%、6%ぐらいの成長率。日本の高度経済成長期と同じぐらいの、そういうのを持続しているということだったので、そういった提案をして、幸いにも採択いただいて、ご協力いただいたと。結果として、聞いていらっしゃるかと思いますが、タンザニアの子供たちは、とにかく後で聞いたら不安だったと。日本は行ったことないし、もちろん海外旅行なんてしたことないわけです。本当に食べ物どうだろうか、ちゃんと人として扱ってもらえるとか。差別受けるのではないかと、非常に怖かったそうですが、大変、長井工業高校の生徒の皆さんと親しくなれて、あと、勉強もすごく充実してよかったということで、非常に喜んでいただいて、これからも続けようとなったんですが、そんなことがきっかけで、今後とも続けていきたいと。これは、一つに、長井工業高校の校長先生はじめ、教頭先生、先生方のご理解と、あと、子供たち、生徒たち、非常に優し

く迎え入れていただいたということがあったと思っています。

これは、ぜひ引き続きということで、考えておりまして、これは私どもだけではできないので、JICAさんを通じて、いろんな形で考えていきたいと。そのときに、午前中の勝見議員のご質問の中で、商工会議所の受入体制で、商工会議所のほうでは、県外留学のときに、人数がある程度増えてきたら、ぜひ自分たち有志でお金を出して、空き家とか、空き工場を改造して寮にしようということだったんで、ぜひタンザニアの学生も受け入れられるようになったら、うちも一緒に乗せてくれと。何かもしかしたらいい補助事業とか見つけられる可能性もあるのでみたいな、そういうことを考えながら、今後続けていきたいなと思っています。

2点目でございますけれども、JICAと長井市、本事業でどのような成果を想定しているかということなんですが、これは、3点目のビジネス・スタディツアー、どのような内容だったかということにも関わるんですけども、正直なところ、ビジネス・スタディツアーについては、あんまりプログラムといたしますか、教えられてなかったんです。行って、うんみたいな感じで、職訓校に行くのはいいんですが、いろんな向こうの経済人と会わなくてはいけなかったんです。初めてです。データがあんまりなくて、それで、最後に、3社、4社ぐらい、ダルエスサラームの職業訓練校とドドマの職業訓練校と、いろんなところを見てきました。びっくりしたのは、ダルエスサラームの職訓校が、私が行った去年、おとしから見たら、見違えるほどよくなっているんです。日本人のシニアの協力隊の人がいろいろ整備してくれたんでしょう。

それと、あと、企業の方々と話したとき、会社の経営者とか、あるいは、留学したのだけど、今度、タンザニア戻って、自分で起業をされた方とかのお話を聞いて、それで、びっくりした

のは、経済産業省の事業とかで、30年以上前です、正確には何年からとは聞いてないんですが、もう相当程度、何千人の研修生が日本に来ているんです。本国に戻って、企業の支える人材、幹部、あるいは社長として働いている人がたくさんいると。その人たちが大変な日本ファンなんです。日本とはこれからもぜひやりたいと。ついては、日本で教育を受けさせたいんだと。

今回、TICAD、アフリカ開発会議の中でも、今度退陣表明された石破総理がニュース聞きますと言っておられたんですが、今回のTICADは34か国のアフリカの国を招待していると。アフリカは25年後の2050年ですね、このときに人口が25億。今12億ぐらいなんです。倍になると。世界の人口がその想定は約100億だと。そのうち4分の1がアフリカになるんだと。その開発途上国ですけども、25年後は相当大きく成長して、国民も豊かになるだろうと。TICADでいろいろ誤解を招いたホームタウンのサミットというのをやったんですけども、そのときにタンザニアの日本の経済産業省に当たる大臣、女性の大臣がいらして、発言してくれたんですね、フロアからということで。そこで言っていたのは、タンザニアも20年後とか30年後、倍以上の人口になると。けども、本当に大切なのは、タンザニアは観光とか農業の産業あるんだけど、それ以外の製造業と建設業とか、まだまだ未熟だと。でも、その人口を抱えたときに、みんなが幸せに暮らせるためには、それなりに職がないと駄目なんだと。そういった仕事のところで、ぜひ日本とはこれからも連携して、そういったところを支援してほしいということで。

これは、我々、タンザニアの人たちというのは、地元に住んでいる方とか、あるいは、何人も長井にもいらしたし、我々、向こうに行って、非常にメンタル的に優しいですし、楽観的

で、割と粘り強いといえますか、ですから、非常に我々の東北の人たちとはうまくやれるような。現に、ですから、我々だけではなくて、例えば隣の宮城県の丸森町とか、あとは、同じくホームタウンになった新潟県の三条市なんかは、いろんな交流をしていて、非常にメンタル的にもいいということなんで、そんなことで、これからいろんな経済の付き合いがたくさん出てくるという中で、私どもは草の根の市民交流をすることによって、日本の文化とか、あるいは、日本語も習得したり、そして、日本の法とか、体制とか、そういったところなんかも勉強してほしいと。

今回のオリパラのホームタウン、ホストタウンのとき感じたことと、今回のホームタウンで感じたときの自分の感想なんですけども、タンザニアは、社会主義国家だったんですね。今は少し変わったと聞いていますが、具体的に分かりません。例えばドイツも、日本とはちょっと違いますよね、政治体制。中国ももちろん違うわけです。そういったところを我々は、特に行政に関わっている私どもとか、議員の皆様も、そこをよく理解しないと、ボタンの掛け違いが出てくる。多分、ホストタウンのときもそうだったんですが、行ったときに、一番ストレスだったのは、政府の事務次官とか、そういう人といきなり話をしなくてはいけないわけです。あと、時に大臣とか出てくるんです。そうすると、こちらが言っていることが分からないんですね。我々、オリンピック・パラリンピックにいらっしゃるときに、いろいろ日本の滞在期間中とか、あとは、健康管理とか、あと、練習するときのトレーニングするための会場とか、そういったところ応援しますよということなんだけど、行くと必ず言われるのは、ここは中国で整備してもらったところだと。日本は、長井は何やってくれるんだと、これです。それから、何か競技の用具をこれだけ欲しいとか、そういうこと

を言われるわけです。それが、何でかという、地方自治が違うんです、日本とタンザニアと。アフリカも多分違うんでしょうね。ですから、議員も市長も、我々、その地域の住民から、市民から選ばれてやっているんですけども、もう官選です。国で決めて派遣するんです、市長なんていうのは。議員は、中国の場合も同じなんですけど、議員は選挙で選ばれる割合もあると。政府が決める議員の割合もあるんです。そこが全然違いますし、例えば、ちょっと話が長くなって、ごめんなさい。ドイツのバートゼッキンゲンなんかは、同じ民主主義なんですけど、あそこはちょっと違いますよね、大統領制でありますし。福祉というのは、行政でやってないんです、地方自治で。福祉は教会でやっているというんです。考えられないです。そういうふうには違うんです。ですから、シティホールとか、市役所行くと、もう人数少ないし、ほとんどいない、人が。都市計画とか、そういったところで、観光振興なんていうのは、商業振興も含めて、民間がやっているんです。商工会議所みたいなのが。

だから、国によってそれぞれ違うので、本来、我々が果たすべき役割というのは、その国の人との交流もそうなんだけど、国の体制違った中での交流。そして、それをお互い交流していかないと、本当に仲よくなれないです。ましてや、特に開発途上国は、我々、先進諸国に対して、自分たちの産業振興のために協力をもらいたいということなんだろうから、そこがポイントだと思います。

話が、すみません、あちこちへ飛びまして、申し訳ありません。ビジネス・スタディーツアーについては、先ほども申し上げましたけれども、日本に留学とか、3年間働いてきたという人たちが非常に日本大好きで、そういう人たちが会をつくって、これからその会員を増やしていこうと。日本に行くという研修生とかなんかは、

我々、基本的な日本語を自分たちで教えてやらなくてはならないと。でも、ぜひ日本で温かく受け入れて、教えてくださいということなので、私どもの今後の考え方としては、この事業を引き続き展開して、ぜひ長井で研修を、長井工業高校とかで勉強していただいて、その際、制度が日本の制度にのっとってアルバイトもできるはずなんですね。それとあとは、その後、就労ビザみたいな形で研修生で受け入れていただくことができるかどうか、そういったところなんかも含めて、地元の、特に今回のビジネス・スタディツアーは商工会議所の副会頭とか、常議員の方たち、経営者がいて、何とか、人手不足なんで、そういったところで研修生として来てもらいたいという考えもありますので、移民ではないので、それは国の制度ですから、あくまでも国の制度にのっとって、来ていただくことが地元の経済もありがたい、支えていただけるし、今度、我々が向こうのほうでビジネスもできると。

ちなみに天童の山本製作所の支店があって、そこの方たちとたまたまお店で会って夕食したところ、いろいろ話ししてきました。山形県の企業も向こうでビジネスを展開しようとしていますし、いろんなチャンスあると思いますので、ですからお互いが、日本だけではなくて、タンザニアもうちもお互いにいい影響があるように、ウィン・ウィンの関係といえますか、そういったことが大切だと思っています。すみません、長くなりまして。

じゃあ、2点目のふるさと長井会について、私のほうからは、交流人口拡大のために県内在住のサポーター会員の拡充に取り組んではどうかということなんですが、ふるさと長井会については、もともと山形県35の市町村の中で、全部が全部あるわけではないんでしょうけども、長井市出身の方たちを中心とした、首都圏とか、そういった会というのは、置賜の中で長井市だ

けがなかったんですね。昭和の時代につくろうと努力されたんですが、駄目だったんです。ただし、致芳地区の人たちを中心に、関東致芳会というのが今から15年ぐらい前まであったんです。そこが解散するということと、私ども、幸せサポーター、ふるさとサポーターみたいな形で応援団を首都圏の皆様につくっていただいていましたので、それを発展的にふるさと長井会にさせていただいたと。

趣旨としては、ほかの県人会が概しての話ですけれども、長井出身の人たちが集まっているいろいろな情報交換したり、お互い励まし合って都会で支え合って生きてきた。だんだん高齢化になって、皆さんそれなりの地位を持ってきたら、今度、ふるさと長井のために何か応援するぞみたいな、そういう長井出身者の首都圏での親睦会的なものが多いんです。でも、私どもはちょうどふるさと納税というのが出てきたときでもありますし、あとは、人口がどんどん減っていて、昔あった東芝も、マルコン電子も協同薬品工業もグンゼももうどんどんなくなって、大変なことになっているんで応援してほしいということづくってもらったんです。そこまで具体的に言わないけど、彼らは分かっていたいて、ふるさと納税もしようと、応援しようということなものですから、じゃあ、会費は取らないで、まず、どうでしょうかと。ふるさと納税いただいたお金なんかで我々いろいろ支援させていただくからということで、会員、だから、辞める人がいないんですね、ほとんど。少しずつは増えていますが。

議員からあった県内在住のサポーター会員の拡充に取り組んではということですが、多分、向こうのふるさと長井会に入っていた人とか、こちらに戻ってきたとか、あるいはそういった方々に、長井在住の方でない方でも声かけて、ちょっと我々のとき、こちらに来るとき会ったり、あるいは応援してくださいみたいな、そう

いう依頼を受けた方のことだと思うんですが、これは私ども行政ではないと思っています。というのは、よく分からないわけです、どの人がサポーターか。それはふるさと長井会の皆様から聞かないといけない。

ですから、私どもとしては、その体制というのは、ふるさと長井会と定期的に交流しますから、そういう制度をつくってもらおうと。それに対して我々はお手伝いするということはそうなんですが、我々がつくるべきのものではないと。あくまでもふるさと長井会のサポーターですから、長井市のサポーターではないわけですね。ですから、そういうふうに感じていますので、ちょっと意見交換といいますか、情報をお聞きしながら相談したいと思っています。

なお、昨日、山形県人会がありまして、そこでふるさと長井会の方6人いらしてまして、会長とか事務局長、あと副会長とか、代理の方とかと、8人か、県人会の役員の方2人いらっしゃるんですので、8人いらっしゃるんですけども、ぜひ年内中に長井でちょっと打合せしましょうと。今後のふるさと長井会どういうふうにより充実させるかということで意見交換しようということでございますので、ぜひこの件についても相談してみたいと思いますので、どうぞ引き続きよろしく願います。

ちょっと長くなって、申し訳ありません。

○内谷邦彦議長 竹田利弘戦略監。

○竹田利弘戦略監 私のほうにご質問いただきましたふるさと長井会の活動内容や組織はどのようなもので、成果をどのように捉えているか、また、ふるさと長井会の一層の周知が必要と考えるが、どうかについてお答えさせていただきます。

まず、組織でございますが、ふるさと長井会は、議員もご案内のとおり、ふるさと長井との交流及び情報交換を密にし、長井市の発展に寄与することを目的として、平成28年10月に発足

いたしました。会員は、ふるさと長井を応援する山形県外に在住する長井市出身者及び会の目的に賛同する長井市以外、県内出身者、在住者を除くの出身者で構成されております。代表所在地を大田区蒲田の東京事務所に置きまして、事務局の一翼を市の総合政策課が担っております。

設立当初は363人だった会員ですけども、現在の9月、今の時点で約1,300人と年々増えている状況ではございます。

会員の皆様には週1回のメールマガジン、山形新聞でやっております山新ふるさとだよりやふるさと長井会のお知らせの配信や、読んで、見て、楽しい、そして懐かしいをコンセプトにしたふるさと長井会の会報を年に1回送付する等、会員向けに定期的な情報発信を行っております。

成果につきましては、ふるさと長井会には、その豊富な人材を生かし、長井市の事業や市内の各団体の取組に対してご支援、ご協力をいただいております。

一例を挙げますと、昨年11月には、千葉県立博物館上席研究員をなされている高橋直樹さん、この方は横町のご出身です、による市内の小学生とその保護者を対象とした市民講座を、また、昨年12月ですけども、湘南医療大学薬学部の学部長で教授の鈴木勉さん、この方は寺泉の出身でございますが、による長井北中学生を対象にした出前授業をそれぞれ実施しております。高橋さんも鈴木さんも、ここ数年連続で学校とか小・中学生対象にいろんな講座をやっていたいております。また、昨年3月には、東京出身の方ですが、長井市を応援して下さる奥山睦理事に長井のDXコンテストの審査員を務めていただいております。あと、昨年度の市制施行70周年の記念式典におきましては、ふるさと長井会幹事で、当時の立教大学スポーツウエルネス学部長の沼澤秀雄さんとのご縁によ

りまして、この方は東五十川ご出身でいらっしやいますが、長井市と立教大学の連携協定の締結に結びつきました。

今年度も引き続き「くるんと」を会場とした中学生のための大学講座を主催する長井市職業観育成連絡協議会と連携して、都内の大学で教鞭を執られている現役の先生2人、先ほどの沼澤先生ともう1人の方に講師を務めていただくなど、長井市で行う各種事業にもご協力いただいております。

そのほかにも、ふるさと長井会の皆様が「長井に友達を連れて行こう！キャンペーン」を何回かやっていただきまして、その都度、10人とか20人とかいう方を時々連れてきていただいております。

また、長井市が東京事務所を設置する東京都の大田区において、このふるさと長井会がつなぎ役となり大田区内のまち工場を一般公開し、ワークショップを実施するおおたオープンファクトリーというのが今年もございまして、その場所に長井市の産業関係者を積極的につなげて、産業連携できないかということの事業もやっております、関係人口とかの創出にも尽力いただいているところでございます。

先ほど市長からもございましたが、また会員の皆様には、昨年度のふるさと長井会の総会の際にも安部義男顧問のほうからもありましたが、とにかく思いはふるさと納税という方法もあるよということで積極的にPRしていただきまして、具体的な名前はなかなかこの場では申し上げられませんが、多くの皆様にふるさと納税という形でご協力いただいていることも事実でございます。

周知につきましては、ここがちょっと課題です。今いろいろな場面で私どももお答えさせていただきますが、先日の何かの機会にもございましたが、長井市のホームページの閲覧数が今非常に減っております。どこの団体もホームペ

ージはアーカイブ化したものチェックしに行くところとか、積極的に情報発信ではなくて、どちらかというと何かあったもの、見るものというホームページに変わっておりまして、ホームページの充実と、あと、SNSで情報発信という充実と、ということで非常に長井会のほうでも今苦労しているところでございまして、例えば今は取り組んでないInstagramとか、あとエックスとか、あとLINEとか、そういうものを積極的に周知をしていったほうがいいのではないかとということで、市の事務局等と役員の皆様が中心に積極的に情報交換されまして、ホームページ大変見やすくなりましたし、会報も大変見やすくなりましたが、これ以上の積極的な周知というのはSNSのもっと積極的な活用ということで、ふるさと長井会の皆様の中には企業のほうで情報発信担当している方おりまして、そういう方にお聞きしますと、もうちょっとレベル感が全然違う、お金のかけ方が違うような発信やっているものですから、そこまではできないんですけども、どうやって長井会のほうでもできるかということを今意見交換しているところでございまして、ここは若干課題になっていると今感じております。

○内谷邦彦議長 9番、鈴木富美子議員。

○9番 鈴木富美子議員 最初の質問につきましては、市長から丁寧に詳細をお聞きしました。

ただ、メディアがあのように騒いでしまっているというか、私たちもちょっと勘違いをするようなメディアの報道だったので、本当の内容はどうかなということで、私たちは一生懸命、工業の生徒、タンザニアの生徒との交流を図っているにもかかわらず、間違った捉え方というか、考え方の違いが分かりませんが、ちょっと思った以上に大変なことになっているのかなと思ったところで質問させていただきました。

市長が先ほどお答えになったように、今までの交流を無駄にしないように、さらに深めるよ

うに、マラソンもそうだし、工業生徒たちの交流も、私は若い人にはぜひ交流していただきたいなと思っておりますので、その辺、まだ具体的にどうということは、進めるということはないと思いますが、これから何かを考えていることがあれば教えていただければと思います。

○内谷邦彦議長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 人との交流というのは大切ですから、市民訪問団をまた結成していく、あるいは長井工業高校の生徒受け入れていただいたわけですが、向こうに行って勉強するような機会、あとは、長井工業高校に限らず、長井高校もそうですし、あと、長井市内のほかの高校に通っている生徒の皆さんにもそういう機会を設けなくてはいけないと思っておりますので、一番は財源です。

今回、4市があったんですけども、特にどこの自治体というのは申し上げませんが、有名な製造、作っているものがあるまちでは、それだけで42億円と言うんです、ふるさと納税が。ですから、我々は本当にふるさと納税で売れるものがないので、非常に辛いなど。ですから、例えば仮に1億円ぐらいの基金があれば、相当子供たち交代で経験できる、あるいは市民訪問団で行くときも、市民の皆様は何割か、じゃあ、行政で持ちますからみたいなことができるし、あとはだんだんそれが、タンザニアに限らず、ドイツでも、あるいはこれからリヒテンシュタインとしようとしていますし、あと中国も、そういったところと行き来するということが非常に重要ですので、そういったときの財源というのが一番大変なのかなと思っていて、ですから何とかふるさと納税を、我々一番合法的に一財を、一般財源を獲得できるものなんです。それがなかなか、何しろ工業製品で販売できるものがないんです、部品では販売にならないので。

ですから、そういったところあたりをまず今後考えていきたいと思ひますし、あとは、1年

置きではございますが、ドイツのバートゼッキンゲンさんのほうから声をかけていただいて、今年もイタリア、フランスなんかもそうだったようですが、十何人、学生が。去年、おとしもそうです、南中、北中、長井高校をはじめ、そういったところなんかもこれから応援できるような体制を取っていきたくて思ひますので、ぜひその辺のところ何か財源を確保してまいりたいと思ひますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○内谷邦彦議長 9番、鈴木富美子議員。

○9番 鈴木富美子議員 そうですよね、財源がなければやりたいこともできないということが実際の問題であると思ひます。ふるさと納税はみんなで考えていかななくてはならないことがあると私も思ひますので、ぜひ頑張って子供たちを育てていきたいなと思ひますので、これからもよろしくお願ひいたします。

ふるさと長井会につきましては、私も去年参加させていただいて、知らないことばかりでちょっとびっくりしました。あんなに皆さんに応援していただいているということは正直、本当ありがたいなと思ひたところでした。

しかしながら、私、地元にて、ふるさと長井会をよく知らないということはちょっと失礼なことだったかなと思ひたり、地元にいる人も一緒に活動できるようなことがあればいいと思ひて、このサポーター会員というのを出したんですけど、その辺もう少し組織を見直しといったら失礼ですけど、しながら、もう少し長井市の人も、例えば先ほど戦略監が言われたように、ふるさとに行こうというツアーがあったりしたときに、地元の人も受け入れられるような体制も、そうすると人と人がつながっていくということで、何らかのお役には立つのではないかなとちょっと思ひていたりするので、サポーター会員の在り方をこれから考えていただければと思ひますが、その辺はどうでしょうか。お願ひ

します。

○内谷邦彦議長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 これは竹田戦略監とも相談しますが、市民の方がもっと理解していただいて、家族、あるいは親戚が首都圏に住んでいると、まだなっていないんだったら、なったらという声かけをしていただいたり、あるいはふるさと長井会の人たちが結構友達連れてきてくれるんです。そのときに長井市民として、それこそサポーターということで、鈴木富美子議員からの県内在住のサポーターというのは、ちょっと今まで関わり合った人ということなんですけれども、市民の方でふるさと長井会を、サポーターですね、そういうほうがむしろいいのではないかと。多分、県内に戻ってこられたふるさと長井会の方というのももちろんですけども、まずは市民のほうにPRをして、繰り返し何回も言わないと、知らないのと、あと、自分の親戚とか家族が向こうにいて、何かすごく喜んでもらえるような、そういう制度にすべく検討したいと思いますので、よろしくお願いします。

あとは竹田のほうから答弁します。

○内谷邦彦議長 竹田利弘戦略監。

○竹田利弘戦略監 このサポーターという話が出たのは当然ふるさと長井会の方から発案されたものでございます、市で言ったものではございません。それで、先ほど言われたように、私も、あっ、あの会員の方が長井市のこの方を知っているとかなというのも結構、いつも新たな発見がございまして、それで、ふるさと長井会の皆様の思いとしては、ちょっと全員聞いたわけではないんですけども、長井に行ったときにもっとつながりを持ちたいと、あと、自分たちは何ができるかというのをもっと深掘りしていきたいと。そのために、長井の市民の方ともいろいろ膝を交えてお話をしたりしたいなという思いから発案されたようですので、ふるさと長井会の方、

役員の方とも相談しながら、あと、今年、先ほど市長もありましたように、ふるさと長井会の役員の方が秋、冬をめどに長井のほうで意見交換をするということで、今、日程調整中ですので、その辺りを中心にちょっと議論を深めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○内谷邦彦議長 9番、鈴木富美子議員。

○9番 鈴木富美子議員 私は何でこの話をするかといいますと、娘が東京にいて、ふるさと長井会入っていますので、帰ってきました。すると、娘を頼りにツアーがうちに来てくださったりとすると、あっ、こんなふういろんな人がいて、長井から出た人。ふるさと長井会には長井市外の方も、県外の方も、何か北海道とか福島とかいらして、1泊いつもしていくんですけど、こんなに長井のこと好きになってくれるというのはすばらしいなと思ったりしたので、こちらの受入れのほうができているのかなってちょっと思ったりしたので、ぜひ今回の打合せというかな、役員会でその話もしていただいて、少しでも多くの市民に理解していただいて、もっとすばらしい会にしていきたいなと思いますので、人口減っているんで、長井をPRするにはふるさと長井会の皆様が一番長井のこと分かってらっしゃるのではないかなと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

以上で私の質問終わります。

鈴木 裕議員の質問

○内谷邦彦議長 次に、順位4番、議席番号4番、鈴木 裕議員。

○4番 鈴木 裕議員 皆さん、お疲れさまです。一般質問初日、4番目の清和長井の鈴木 裕です。よろしくお願いいたします。

質問項目ごとに一問一答方式で質問させてい